

2015 年 8 月　宮古北高校にて「津波てんでんこの」を考えた宮古訪問プログラム

ともしび
共生委員会ニュース

2015 年度　3 号

2015 年 10 月 1 日版

共生・校外学習委員会は平和や共生に関わる活動、修学旅行などを担当する教員の委員会です。原爆投下の地、長崎を訪れる 2 年生の修学旅行だけでなく、高等部の 3 年間の生活を通じ、同じ社会に共に暮らす様々な人々との関わりに目を向け、平和や共生の問題を考えていきましょう。この共生委員会ニュースでは、様々な経験をする機会を得た生徒や教員の声も他の多くの皆さんへ届けたいと思っています。その経験を共有し、一緒に考えるきっかけとして下さい。

65 期　修学旅行事前学習（選択課題より）

戦後 70 年ということで、たくさんの第二次世界大戦に関する報道が行われた今年の夏が過ぎ、高等部では 2 年生が被爆地長崎を訪れる修学旅行の季節が近づいてきました。春休みの課題よりひとりの 2 年生が書いたものを紹介します。「平和」について考えながら読んで下さい。

「永井隆の著作を 1 冊読み、永井博士の思想をまとめるとともに、戦後の長崎市が毎年発表する『長崎平和宣言』について調べ、あなたの考えを述べなさい。」

永井博士の「この子を残して」という短編を読みました。原子爆弾を受けたときの体験や当時の情勢や博士の考えなど、様々な内容が記されていましたが、すべてを通して永井博士の子どもたちに対する深い愛情を感じました。原爆の放射能をあびた体でなお原子爆弾症の研究をしていたために死期を早め、脾臓がふくらみ子どもを抱きしめることすらできなくなった博士の切ない心情と、子どもの身を案ずる様子がよく伝わってきます。しかし、博士はそんな運命を嘆くことなく肯定的に受け入れています。神は私を愛したくて創造なさった。神に悪意の創造はなく、すべて神の愛の節理のあらわれである。なのでやがて訪れる死もまた神からの最大の愛の贈り物である。だから苦しみも痛みも必要なものとして悦んで受け入れよう、と心からの信仰をもっています。神の前では子どものように天真爛漫に甘えろと博士自身が言っていた通り、本当に純真な心持ちで博士は神と向き合っていました。

そして永井博士のもう一つの強い信念として親子の愛は唯一絶対であるというものがあります。妻を原爆で失い、自身も寝たきりの体になり、二人の幼子を抱え、生活苦に追いやられてもなお後妻をとりませんでした。それは、父の愛、母の愛は独特の愛で、他の者が本質的に全く同じ愛を与えることは決してできないと強く思っていたからです。それと同時に親子の愛には何も敵うものはないと思っています。博士の愛は自身が亡くなった後も子どもたちにとってただ一人の父、母であり続けようと、「何人といえどもこの子の前に、お父さん、お母さんと称えて立ちあらわれることを許さぬ！」と宣言するほど強いものでした。

そして、長崎平和宣言を読んだとき、「被爆者が単なる被害者としてではなく、人類の一員として今も懸命に伝えようとしていることを感じとってください」という言葉にはっとしました。亡くなった七万四千人、傷ついた七万五千人、数字にすると淡白ですが、一人ひとりに親子の愛があり、生きていたということを神の愛を信じつづけた永井博士から教わったからです。しかしこの当然といえる事実を本当に理解している人は今の社会にはたくさんはいないのかもしれません。私自身、長崎平和宣言のことを今まで全く知りませんでした。私たちは戦争体験を聞ける最後の世代を言われています。今、私たちにできることは未来のために平和への思いを受けとめて、その記憶を語り継ぐことだと深く実感しました。　（65 期　J）

Connecting Rails ー結ぶ心、つなぐ旅路ー

Connecting Rails チーフ　S. J. （HR208）

今年度文化祭で私たちの団体 “Connecting Rails” は、鉄道模型の体験運転や自作の絵はがきの販売、そして資料展示を通し、三陸鉄道を支援する活動を行いました。今回はこの場をお借りしまして、私たちがどのような活動をし、その活動を通して何を学んだのかをお伝えしたいと思います。

当団体は 6 月ごろ、私と友人 2 名で「文化祭で鉄道関係の展示をしよう」というところから始まりました。高等部の文化祭でこのような企画はあまり聞いたことがなく、最初は不安な部分もありましたが、次第に仲間が集まり、2 年生 13 名で本格的に始動をしました。

私たちは議論を重ねまして、この企画を通して「三陸鉄道」を支援していきたいと考えました。三陸鉄道は、岩手県の三陸沿岸部を走る路線を持つ第三セクター方式の鉄道会社です。東日本大震災で甚大な被害を受け、津波による線路の流失や車両の故障などにより、震災直後は全ての列車が運行できない状況になってしまいましたが、クウェート政府による支援などもあり、2014 年 4 月 6 日に全線が復旧し、運転再開を果たしました。しかしながら、まだ大きな赤字を抱えている厳しい状況であることにも目を向けなければならないと思い、また三陸鉄道がこれからも三陸地方の方々の生活に寄り添う鉄道として走り続けて欲しいと私たちは感じ、今回の支援を決めました。

全線で運行再開をされてからは、三陸鉄道支援募金を行っている団体は激減し、私たちの考えに合致する支援団体がなかなか見つかりませんでした。そこで私たちは三陸鉄道に直接、自分たちの気持ちを伝えようと、顧問の先生を通じて電話で問い合わせました。そうしたところ、総務部の担当の方から、支援金は直接、三陸鉄道に振込でお渡しできることと併せて、展示に必要な写真などの資料提供をしていただけるとのお話を頂きました。


鉄道模型体験運転

私たちは、当初から力を入れていた鉄道模型の体験運転だけではなく資料の展示でも内容を充実させることができました。特に三陸鉄道から頂いた写真を活用した「島越駅付近の復旧過程」の展示には多くのお客様が足を止めて見て下さりました。また一般公開時に、三陸の久慈出身の方がお越しになって「ありがとう。頑張って下さいね。」と私に話しかけて下さった場面がありました。私はその時、三陸鉄道が地元の方々にとても愛されていることを改めて感じました。


三陸鉄道資料展示

募金は総額 39,060 円集まり、私たちの予想を大きく上回る結果を残すことができました。私たちの活動の趣旨にご賛同頂き、ご協力頂いた皆様に感謝申し上げます。今回の活動を通して、私自身も改めて日本人の鉄道への信頼の厚さを感じることができました。「鉄道」とは心を結び、日々をつなげるものなのだと思っています。そのようなことを今回の展示で多くの方々にも感じていただけましたら幸いです。

宮古訪問プログラム感想

HR306　A. K.（環境美化委員長）

「津波来たよー。」その言葉が終わった今でも頭から離れない。私がこの宮古訪問プログラムに参加したきっかけはメディアを通してしか見たことがない東北の現状を自分の目で直接見てみたい、そこから私たちができることを考えたいと思うところから始まった。4 年経った今の東北、宮古の景色の一分一秒を大切に目に焼き付けようと心に決めていた。しかし、私はある時にその決めたことができなくなった。それは学ぶ防災の時のある住宅で見たビデオ鑑賞の時だった。ビデオは 2011 年 3 月 11 日の田老観光ホテルからの撮影で津波が押し寄せてくる様子だった。津波のやってくる数分前からビデオは始まり、静かな田老地区の様子が写っていた。私は初めてちゃんと津波の映像を目撃すると思って身構えていた。そして津波が防波堤を乗り越えた瞬間、私はテレビではない別な所に目を背けてしまった。その時にビデオから流れてきた言葉が「津波来たよー」と撮影者が逃げている人にいっていた言葉だった。それから数分後テレビに映っていたのは津波の水によって海と化した田老地区の姿だった。私は自分が情けなく感じた。来る前に決めていた直接自分の目で見ることができなかった。それは自分がその事実を受け入れたくなかったからだ。もし私の住む町にこんな津波がきて、思い出の家、庭を流していってしまったらと思うと心が痛くなり、見ることができなかった。私は一つ学んだことがある。それは東北のことについて私たちは本当のことを知らないのではなく、知りたくないのではないかということだ。今回、行くにあたって私は東日大震災のことについてできるだけの知識は蓄えて来たつもりでいたが、それは事実のほんの一部であり、このように見なければいけない事実があるのに目をそらしてしまうのはこの生活からは想像ができない、したくないからである。でも、この震災と同じぐらいの被害にあうことは都会に住んでいてもいずれ起こりうることだ。地震、津波にあった時私たちはどうすればいいのか。それを考える上でも私は真実と真正面から向き合わなければいけないと思った。そこから学んだ防災の知恵を生かして今後の震災に備えることを私たちがしなければいけない。東北のほかに新たに被災地を作らないこと、それは被害を最小限におさえることにつながり、なおかつ東北にとっても貴重な復興労力を失わなくて済むことになる。実際に現地に行ったからこそ私たちがするべきことは現地の人の声、真実を知らない周りの人に伝え、そこから自分たちが防災への意識を高め、同じ過ちを繰り返さず、被災者を一人でも少なくしなければならないと思う。最後に学ぶ防災の時のガイドさんが「人間は自然には勝てない。だから、防波堤があるから大丈夫、高台だから安心と思ってほしくない。」と涙ながらにおっしゃっていました。つまり一人一人の意識が大切だということ。これは今からでもすぐにできることなので、まずは小さな一歩かもしれないが友達や家族と防災のことについて話してみようと思った。





「津波来たよー。」と言われる前に避難できるように。

震災被災地を支援する大学ボランティア団体紹介

今年の 1 月と 6 月に、東北の被災地で活動する大学生達が高等部を訪れ、これまでの活動を紹介し、支援ボランティアについて一緒に考える会（FOR 会）を開いてくれました。話をしてくれた大学生の団体を紹介します。


宮古市での現地活動 2015 年 8 月

Message for 3.11 東日本大震災復興支援愛好会

団体紹介：私たちは、2014 年 5 月に設立した大学公認のサークルです。私たちの志は、変わりゆく東日本大震災について、東京で伝え続けることです。それは、東日本大震災の記憶を忘れず、後世に残すためです。そして、「まだ何かできるかもしれない」と思う仲間を増やすためです。そのために、定期的に岩手県宮古市に滞在し、地域の方々との交流や活動を続けています。高等部では、2015 年 1 月と 6 月に「FOR 会」を開催させていただきました。また、学内のチャリティーイベントやボランティアフォーラムに参加しています。私たちは、現地と東京とを結ぶ伝書鳩のような存在になり、今後も“3.11 のメッセージ”を紡いでいきます。

先輩の想い： 2015 年 3 月に高等部を卒業した後、大学入学とともに Message for 3.11 東日本大震災復興支援愛好会のメンバーとなった先輩 6 名の想いを紹介します。高等部で岩手県宮古市の高校生との交流に取り組み、現在も活動を展開、継続しています。

今夏は大学生6名で宮古を訪問し、「現地の方々と一緒に過ごしながら活動する」ことを大切にしながら訪問してきました。震災から四年が経った今、現地活動の内容も変わりつつありますが、実際に現地に行くことには大きな意味があるとも感じます。(T.J.)	3 年ぶりの宮古訪問でした。まだ道が整備されていなかったり、瓦礫が残っていましたが、現地の方たちはとても明るく、むしろ僕たちが元気づけられました。復興にはみんなのような若い力が必要だと思います。興味のある人は一度、足を運んでみてください。(N.Y.)	様々な地域や施設での活動を通して、現地に住む多くの方が言っていたこと、それは「被災地と呼ばれなくなることが一番の復興。」でした。まさにその通りだと思った自分は、現地で生活している方々が抱えているものが少しでも軽くなるような、そのことを胸に留めながら活動に取り組みました。その結果、今まで以上に思い入れ深い数日間となりました。（A.H.）

FOR 会について


第一回 FOR 会　2015 年 1 月 27 日

Reconsider Opinions for our Future. あの日から四年半。防災の意識が薄れつつある今、想像を超えた自然災害に遭遇した時、あなたはどう乗り越えるのか。同世代の声を聞き、私たちと共に未来の意見をもう一度考えていきませんか。(T.K.)	初めての FOR 会でしたが真剣に話を聞いてもらえてよかったです。第 3 回はより多くの生徒さんにきてもらいたいです。(N.H.)	東京で報道されているニュースでは伝えきれない、現地の人々のそのままの声を伝えていくことが、人々の関心を呼ぶという形で、一つのボランティア活動になるということを知りました。　（C.T.）

参考書宅救便　ボランティア愛好会

団体紹介：東日本大震災で被害にあった中高生の学習環境を改善する目的で 2011.03.17 に設立されました。設立当初は団体名にもある通り「参考書を集め、ニーズに応じて現地に送る」という活動を主としてきました。しかし、時間の流れとともにニーズが変化し、現在は現地活動と風化防止活動が中心です。その具体的な活動は福島県南相馬市にて小中高生を対象に勉強会・交流会の開催、月命日の毎月 11 日にメンバーが震災や東北への思いを綴った分を Facebook に投稿しています。

毎週水曜日にはメンバーが集まってミーティングを開き、現地訪問の計画等を話し合っています。このミーティングを通じて「自分の意見を発表する力、聞いた意見を速やかに考え、まとめる力」を身につけられます。

今年 6 月には FOR 会にゲスト参加し、活動紹介や南相馬の紹介をさせていただきました。

高等部生へ： 今自分の周りにある生活を大切にしてください。「そんな当たり前なことをわざわざ…」と思われるかもしれません。しかし、四年半前の震災でその≪当たり前≫が崩れた人が沢山います。　例えば家に帰れたり、ご飯が食べられたり。それらの当たり前が当たり前でなくなった時に初めて当たり前の生活に気付く人もいます。皆さんには今自分の周りにある生活、そして高校生という限られた時間、周りにいる仲間・友人を大切に日々過ごしてほしいと思います。


南相馬市にて勉強会


毎週のミーティング風景

Youth for Ofunato（YFO）

活動内容：岩手県大船渡市で震災の復興支援に携わった青学生が中心となって立ち上げた復興支援団体です。現在は大船渡市で夏祭りの開催協力といった地域のコミュニティ形成支援や漁業体験といった人物交流を実施しています。震災以前からの課題である人口減少といった問題についても復興の中で貢献していきたいという思いから、他の NGO や政府、地方公共団体ではできない学生らしく、若い力で地域の問題に取り組んでいます。

今年の夏は、震災後から青学生が継続してきた仮設住宅での盆踊りの開催協力を実施しました。住民の方々の転居も決まり、今年が最後でしたが、最後まで携わり、復興に寄り添えたことが何よりでした。

ほとんどが船渡は初めてという学生ですが、復興支援を通して、温かく受け入れていただき、地域の方々との交流を通して、大船渡にご縁をいただいてきました。卒業した学生も毎年夏祭りには、大船渡まで足を伸ばし、継続した交流をもっています。訪れた学生、卒業生が大船渡のファンになり、大船渡に貢献したい、応援したいという気持ちを持つようになり、何度も訪問しています。　ボランティアはどうしても何かを与えなければという気持ちが強くなりますが、私たちは大船渡の応援団として、大船渡の方々とともにこれからも歩んでいきたいと思っています。

高等部生へ：　学生時代にボランティアで東北に行く人は多いと思います。大船渡の方々のためにと思いを持って訪問しますが、かえって大船渡の方々からたくさんいただいて帰ってくる学生が多いです。こうした人々のあたたかさにふれることができる場所が大船渡にはあると思います。このような誰かのために、時間を費やすことができることも、学生だからできることではないでしょうか。

